

第676号  
令和3年10月23日  
題字は二代真柱様  
大阪市北区池田町13-17  
天理教はるのひ分教会  
TEL・FAX  
06-6358-2630

読者へ  
はるのひ館



心の成人をめざして  
「よるいび・つししみ・はたらき」

## 『非常識?』

『一日一回おさづけ』の中には世間的に見ると、非常識と思われるような考え方や通り方がいくつも出てきます。

昭和二十二年七月末、父がシベリアから復員してきた時、父は母がてっきり化粧や着物で出迎えてくれると思いついていたのに

母は修養科講師という立場を優先して、舞鶴港にも京都駅にもおもむかず (P48)

天理駅で生徒さんたちとともに素顔のまんぺ姿のまま父を迎えました。その純真素朴な母の生き方に

あたかも啓示を受けたように父は新たな人生の方向を決めるのですから、最も重要な場面とも言えます。

また、母が昭和二十三年六月、私を出産後体調を崩し、さらには次男を妊娠していつそう体力が弱まり (P49)

母子ともに生命危うしとなった際にも、また父が結核療養所の修養科講師として勤め、当然のように肺結核をわずらい

血を吐きながらも (P107)、二人とも薬も飲まず注射も打たず、それでいて無事に危機を乗り切りますが

この間の二人の考え方や生き方は常識にそむくような一般的には最も誤解を招く場面です。

ですから決して安易にお勧めできませんが、しかしあえて理屈をつけて説明をこころみれば

相対価値の人間社会とは別の絶対価値の理の世界があつて、父母は理の世界で生きていたと思われれます。

例えて言えば、私たちは地上わずか1km以内の気圏に暮らしていますが、地下は約6,400km (地球の半径)

そして天空は果てしない宇宙へと広がっていて、どちらも測り知れない動きと働きで地上を包み支えています。

ポツポツと雨が降れば、地上の私たちには単なる小雨かそれとも台風の前触れなのかはつきりとは分かりませんが

最新の衛星情報からは雲の様子とこれからの動きが明らかに見て取れます。(続きは次ページの『講話』に)

## 九月講話

会長 芝 太郎

### 『101回おさむの本について』

今月は、この『月報 676号』一面の話の続きとなりますが、父母は相対価値の人間社会に暮らしながら、精神は絶対価値の理の世界に生きていたと思われることについて、以下にしるします。

ポツポツと雨が降ってきてても、地上に暮らす私たちには、単なる小雨で済むのか、大きな台風の前触れなのか、その【意味】するところが分かりにくいですが、人工衛星のレイダーやカメラを通して空の上高くから見渡すと、雲の動きが手に取るように明らかになり、小雨が何を意味指しているのか理解できます。

同じように、地上の私たちには大地はじっとして動かないように思えますが、地下ではプレートやマントルとか呼ばれる厚い層があって、それが動いた

り沈んだり対流したりしているそうです。その動きが外に表れると火山や地震となると言われています。つまり私たちの見える範囲だけでは価値も意味も分からないことが多いのです。

そのあたりの実際を「おたすけ名人」と言われた柳井徳次郎先生が二度にも渡って父母に示して下さっています。まず最初は P56～P62 に書かれている父の喘息の体験です。千島からシベリアでの捕虜生活の痛手でしょう、父は修養科に入ったもののか月目の終わり九月三十日から発熱し、やがて激しい咳込みに変わり、夜はふとんにもたれるのみ、寝間着を汗のため四枚も五枚も換える、そんな苦しい喘息を翌年まで続けます。そして一月二十六日、柳井先生の「修養科の先生しなはれ」の一言によって、その一晚でさしもの咳がぴたりと止まります。

次には、P115～P118 に書かれている私の夜泣きの件です。三日続いた夜泣きを先生は「もう修養科やめ、大阪へ布教に行き」の一言で解決されます。修養科の先生になるとそれをやめると、まるで正反対のおさとしてですが、それぞれに大きな価値

と深い意味があったのです。理の世界に慣れ親しんでおられた柳井先生にしてのみ悟れる心の力、心の技だったのでしょうか。

このように、この本には相対価値の人間社会に暮らしながら、人だすけを通して絶対価値の理の世界に生きようとする父母の苦しくも、しかしそれ以上に充実した実人生が書き残されているのです。

相対価値の人間社会を否定しているのでは決してありません。むしろ私たちはそこでしか暮らすことができません。しかし、その暮らしが世界中陽気暮らしとなるためには、抛って立つ自然と生命という絶対価値に精神を立脚するしかないのです。そのことを人類史上初めて身をもって教え明かされたのが教祖（おやさま）なのです。



芝ふみ・はるのひ分教会初代会長夫人

## 二十年祭祭文

これのはるのひ分教会のみたまやに安らげく静けくお鎮まり下さいます

芝ふみ初代会長夫人のみたまの前に

慎んで申し上げます。

みたま様は明治四十五年一月二十五日、芝甚之助・津や夫妻のもと、その次女としてお生まれになり、天満の乾物問屋・芝甚商店のこいさんとして番頭さんや丁稚さんたちにもかしずかれ、当時の女性としてはめずらしく樟蔭高等女学校を卒業し裕福な境遇に育たれました。

しかし、薄命の因縁ゆえか、五歳の時に弟・弘造を亡くし、十一歳の時に姉・せつを亡くし、二十二歳の時に最愛の母・津やを亡くし、みずからも決して丈夫な体とは言えない体質でした。

昭和十四年、二十七歳にして縁談が調い稲葉太七氏

を婿に迎えました。結婚生活わずか三年にして昭和十七年、夫は召集され翌年には千島列島ウルップ島に派遣されそのまま音信が全く途絶えてしまいました。

その間、長男・市郎を生後間なくして亡くし、昭和十七年には弟・幾之助が戦地フィリピンで亡くなり、さらに追い討ちをかけるように戦争に敗れてひと月も経たない昭和二十年九月に可愛い盛りの長女・和子四歳を亡くし、そして今となつてはただ一人杖とも柱とも頼む父・甚之助を昭和二十一年五月五日に亡くし、もはや荒野に素裸で放り出されたかのようになりこの世に全くの一人、天涯孤独となつてしまわれしました。この時、よく正気を保たれたものと思ひ議でなりません。ですから、柳井徳次郎先生のお諭しのまにまに長年受け継いできた財産を処分するとみたま様が言い出されたのを親族一同が狂気のせいだと思つたのも無理からぬことと存じます。恐らく全ての人々が止め諫め非難したことでしょうが、身内を次々と亡くす運命の中で、人間思案の無益を悟つたみたま様は、理の思案、理の決断に生き

る以外、選ぶべき道が考えられなかったに違いありません。「掃除が終わつたら、お客さんは帰つてくるとしよう」との柳井先生の言葉通り、早くも明るる年昭和二十二年、夫・太七氏は吐く息も凍てつく酷寒のシベリア抑留から奇跡の生還を遂げました。そして、その折、天理駅に教え子の修養科生と共に何ら着飾ることなく純朴なモンペ着のままを迎え出たみたま様の姿に引き込まれるように太七父はその時その場で信仰を決意したのでした。甚之助初代が恐らく夢にまで見た夫婦揃つての道の歩みがようやくにしてここに実現したのでしたが、以後の歩みも決して平坦なものではありませんでした。

みたま様自身は、太郎、文治、光男と相次ぐ出産とそのたびごと死と直面する産褥や心臓の患い、また太七父は喘息、それが治つたかと思つたと喀血また喀血の肺結核、その間には、文治三歳にしての夭折：と数えるだけでもぞつとするような苦悩苦難の連続、ようこそその中を「夫婦揃うてひのきしん」のみかぐらうたそのままに、脇目も振らず正に真一文字、一服の薬も一本の注射も頼らずに「一日一回以

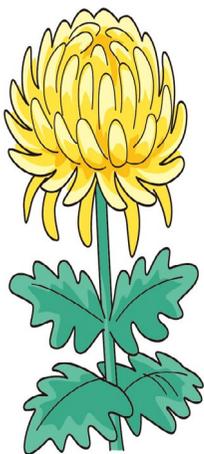
上おさづけ」を揺らぎなき信念としてたすけ一条を貫き通されたのは、教祖ひながたのこの道の信仰なればこそと改めて感嘆せざるを得ません。

さしものまつわりつく病苦事情苦も親神様・教祖を芯に夫婦相和すその真実の前に次第に薄れ離れゆき、教祖六十年祭、七十年祭、八十年祭と年祭ごとに道は開け理は栄え、孫の数も十一人に達しました。しかしまたもや晩年には、太七父は七十歳にして重い心筋梗塞に倒れ、その五年後、七十五歳にしてみたま様は首の骨を折り、手足共に神経の通わない重体となれましたが、いずれもまた再び元気を回復されましたのは、至らぬ私を成人させんがためわが身を痛めてでもの親心と思案いたしますれば申し訳なさに身の縮む思いでございます。

不思議なことに、みたま様も太七父もその後の加えられた寿命は同じく十四年で、太七父は八十四才、みたま様は八十九才でお迎え取りになりましたが、その間がやはり五年間の差ができたということ、夫婦揃うて寿命を十四年間伸ばして下さったということかと存じます。

いずれにしましても、お二方亡き後も、私たちは何とか精一杯理のご用につとめさせて頂いてまいりましたが、この二年近くは困難な世界事情が発生蔓延し、今も治まらないままですが、きょうの日に改めて二十年祭をつとめさせて頂き花々の彩りを添えて深く厚く御礼申し上げます。

今後も教会につながる私ども一同、みたま様のお残し下された「きょうも明日もいそいそと」の言葉を胸に因縁の自覚、癖性分の改良怠ることなく、「世界いちれつ陽気暮らし」の遠大な理想に向かって益々ひのきしん精神でたすけ一条のはたらきに邁進いたしますので、行く末長くいついつまでも厳しくまた暖かくお見守り下さいますようお願いいたします。と共に慎んでお願い申し上げます。



## ☆お知らせ☆

☆ 10月26日（火）8時 本部秋季大祭（祭典後は登殿参拝できます）

☆ 10月29日（金）18時 詰所祭（在住者のみにてつとめます）

☆ 11月7日（日）10時 女子例会・はるのひ会

☆ 11月14日（日）9時半 おぢばがえりひのきしんと男子例会（詰所）

☆ 別席日 未定（教会を11時出発）

☆ 11月18日（木）10時-茶道 13時-女なりもの勉強会

（午前・午後ともどなたでもご参加下さい）

☆ 11月22日（月）前日準備ひのきしん

☆ 11月23日（火・祝）11時 教会創立60周年記念祭

おつとめと記念行事＝①よろづよ八首総オンライン②『一日一回おさづけ』読書感想文コンクール発表会③60周年ビデオ

☆ 11月26日（金）9時 本部月次祭（祭典後は登殿参拝できます）

☆ 11月29日（月）18時 詰所祭（在住者のみにてつとめます）

☆ 人生とは、生涯かけての心の成人・自分づくり

☆ 信仰とは人生観・世界観をみがきつづけること

そのために、用意されているのが

・おぢばがえり ・基礎講座 ・別席 ・三日講習会 ・修養科 ・講習

○ 修養科をおすすめしましょう！（毎月、25日までに申し込み）

・若い方＝これからの人生の基礎固めとして

・年配の方＝人生の美しい集大成のために